

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

カナダの北西海岸先住民にとってのサケの社会・経済的な意義：

現代のクワクワカワクゥ漁師の経済活動に関する事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Kwakwaka'wakw   salmon   commercial fishery   food fishery   crew group 作成者: 立川, 陽仁 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004004">https://doi.org/10.15021/00004004</a>

ンプでニシンを引き上げる作業を夕方までかけておこなうものになる。朝に魚群探知機で魚群を探し、投網してから網をとじ込むまでの作業はあわただしいが、一度網を閉じてからニシンを船内に引き上げる作業は比較的ゆったりしている。そのためか、ニシン漁の操業光景は比較的和やかにみえる。ただし、引き上げるニシンは数十トンもあるわけだから、漁網を引き上げたりポンプを固定したりする作業は単純ではあるが力仕事になる。次項で述べる4名の正規のクルー以外に、船長はこれらの単純な力仕事をこなす要員として、経験を問わずにできるだけ多くの男性を漁につれていく。

他方でサケの場合、比較的目の少ない（粗い）漁網を使用する。魚群探知機は使わず、船長は自身のポイントやサケのハネ（水面から跳ね上がる行動）を目撃したところに投網していく<sup>12)</sup>。もっとも市場価値が高く、それゆえ漁師たちが捕獲の第一の対象としているベニザケの例をとると、一度の投網で得られる尾数は平均43尾程度しかない（その他の種類を含めると170尾くらいになる）。したがって、多くの漁獲を得るにはできるだけ多く——Aは1日15回を理想としている——投網する必要がある。各行程の作業はニシンのそれと比べれば重労働ではないが、クルーたちはニシン漁以上に熟練の技能を求められ、より長時間——現在なら朝の5時から夜の10時頃まで——現場で拘束される（その間ほとんど休憩はとれない）。なお、サケ漁業のフィッシングトリップは長期にわたるため漁船の寝台数以上にクルーを乗せることができないこと、漁の行程においては熟練の技能が要求されることから、船長は経験を積んだ者しかクルーにしない。

### 3.2 クルー集団の構成とその特徴

ニシンとサケではまき網のクルー構成が多少異なるが、それでも船長、技師、ドラム操縦者、スキフ操縦者（それぞれ1名）はいずれの場合にも必要となる。ニシン漁業の場合、このほか多数の甲板雑務者がおり、漁網の引き上げやポンプの固定などの単純な力仕事をこなすことになる（図2-a）。他方でサケ漁業の場合には、上記4名のほか、スキフ側の漁網の端を陸上の樹木などに固定するためのクルー（以下、英語の呼称 **tie-up** にならいタイアップ）を含めた5名が最低限必要な正規のクルーとなる（図2-b）。サケ漁業ではほかに1、2名の甲板労働者や調理師がいるといっそう作業が円滑におこなえるが、これらのクルーは必ずしも必要とは考えられていない。このように、ニシン漁業に比べると、サケ漁業の操業は5名という限られたクルー各々の熟練の技能に大きく依存したものとなっている。

漠然とではあるが、クルーはみずからのクルー職に要求される技能を身体的なワザ

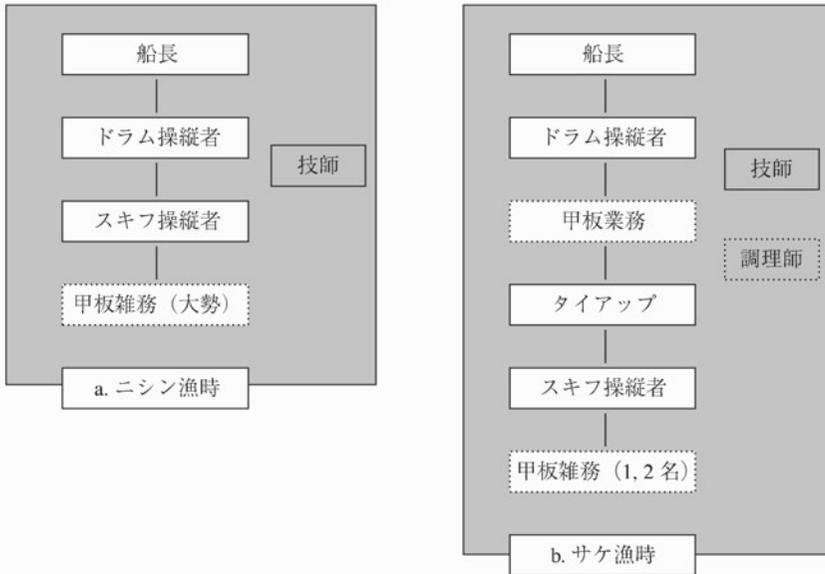


図2 ニシン、サケ漁業時のクルー編成とその序列  
(実線枠は正規のクルー、破線枠は正規でないクルー)

の要素と知的（漁の知識に関する）要素に区分している。そして、相対的に後者の比重が大きく要求されるほど、そのクルー職の技能は高度だとみなす傾向がある。これにしたがうと、もっとも高度な技能を要求されるのは船長ということになる。船長の身体上の動作は単純——操舵室でハンドルを操作し、他のクルーに合図を送るために腕を回す——であるが、その反面、船長には漁場を決定し、潮の流れから漁網や各種の縄を結んだり解いたりするタイミングを指示するための複雑かつ多様な知識が求められるからである。

船長および機器に関する特殊な知識を必要とする技師以外のクルーのうち、技能程度がもっとも高いとみなされるのはドラム操縦者である。彼の身体的動作も単純である——ドラムを回転させるレバーを上げ下げすればいい。しかしこのクルー職に就く人物には、漁場の位置から海底の地形を把握する知識（おもに漁網を巻き取る際に網が拾いやすい木切れ、石、クラゲなど操業上の障害物を事前に予測するため）や、つぎの投網時に網が絡まらないよう幅5メートルのドラムに均等に網を巻くための知識が求められる。まき網でもっとも多いトラブルは漁網の破損であり、その修復には最低でも1、2回の投網を犠牲にしなければならない（漁網の破損は見つかり次第すぐ修復される）。彼らが1日に15回の投網を理想とすることを考えると、漁網の破損と修復が操業上の大きな痛手になることは想像に難くない。だからこそ、ドラム操縦者

が海底の地形を的確に予測し、網の破損を事前に防ぐことが重要になるのである。このように責任の重大なドラム操縦者には、次期船長候補と目されるほど経験を積んだ人物が選ばれる。

ドラム操縦者に次いで熟練とみなされるクルーはタイアップである。サケ漁の仕掛けには、スキフ側の漁網の端を陸上の樹木に固定するビーチセットとスキフが海上で固定するオープンセットがあるが、タイアップはビーチセット時に漁網の端を陸上の樹木に結んだり解いたりするクルーである。船長やドラム操縦者と比べると、タイアップというクルー職に求められる技能の知的要素の比重は大きくない。しかしタイアップに求められる身体的なワザはかなり高度だとみなされている。漁網の放置時、網は漁船によって強大な力で引っ張られているから、それを解くときのしなりはかなりのものになる。したがって、タイアップはこのしなりを最小限にとどめる結び方と解き方を体得していなければならないのである。

これらのクルーと比べて、スキフの操縦者は船外機を使えば事足りるため、あまり経験を問われることはない。事実、男子が新参者としてサケ漁のクルー集団に入る場合には、必ずスキフ操縦者として配置される。

一般に、上述したもの以外の甲板雑務は、ニシン、サケ漁業ともにほとんど経験のない初心者がおこなう（こうした甲板雑務者は、サケ漁業では必ずしも必要ではないが）。しかしサケ漁業においては、クルーの雇用に余裕がある場合、ドラムやスキフの操縦にいたるすべてのクルー業務をこなせるほどの経験者を乗船させ、甲板業務すべての補佐をさせることもある。

彼らの技能の学習方法や操業時間内外における生活は、次の3つの点で徒弟的だといえる。第一に、徒弟集団には「親方一弟子」あるいはより細分化された序列が存在するものであるが、クルー集団のなかでも同様の序列が見られる点である。すなわち、クルーはそれぞれに求められる技能の熟練度に応じて、船長、ドラム操縦者、(もし乗船していれば)甲板労働者、タイアップ、スキフ操縦者、(もし乗船していれば)甲板雑務者という順に序列化されているのである(図2)。なお、機器の整備に関する特殊な知識を持つ技師と調理師はこの序列には組み込まれない。

多くの男子は幼少の頃から夏を漁船上で過ごし、サケ漁の行程を観察しているので、ある程度の甲板雑務がこなせるようになるが、彼がクルー集団の正式な新参者として認められるのは16歳になってサケ漁業のスキフ操縦者になったときである<sup>13)</sup>。それと同時に、この新参者はクルー集団では最下位ながらも「一人前」の漁師とみなされる。こうして「一人前」の漁師になった彼は、さらなる新参者の加入があるとタ

イアアップ、ついでドラム操縦者というように、段階的に階梯を昇る。こうした下位から上位（あるいは周辺から中心）への移行は、当然ながらクルーたちの階梯と技能の段階的一致を導く。クルー集団においては、上位（あるいは中心）に移行すればするほど、クルーが集団において果たすべき責任と役割が増える。しかしそれと同時に、上位に移行してはじめてアクセスが許される諸特権もある。各クルーにとっては、これらの特権へのアクセスを得ることが、階梯を昇ろうとする、つまりは技能を向上させようとする1つの動機付けとなっている。

第二に、徒弟制においては技能の習得がしばしば言語を用いた教育によらず、観察と模倣（あるいは「実際にやってみること」）からなる学習を通してなされるといえるが（レイヴとウエンガー 1993: 76; 福島 2001: 72-73）、これもサケ漁のクルー集団に当てはまる。クルーの学習のなかで唯一対面的な教授法が見られるのはスキフ操縦者がタイアアップの仕事（縄を結び、解く作業）を会得する段階であり、それ以外はすべて観察、操舵室での船長との雑談、みずからの試行錯誤を伴う作業から技能を学習していかねばならない。

第三に、徒弟集団においてある技能を学習する場合にそれとは無関係に見える挨拶や掃除の仕方など生活全般に関することにまで学習が及ぶことがあるが——福島（2001: 71-72）は徒弟制のこうした特徴を「全人格的な学習」と呼んでいる——、この「全人格的な学習」もクルー集団のなかに確認できる点である。フィッシングトリップ中、新参のクルーたちは掃除、食器洗いの仕方などを先輩たちから指導される。これらの作業を通して、彼らは漁船での生活に特有の特殊な水の使い方を学ぶだけでなく、水の貴重さを感じ取ることができる（実際漁船では淡水が不足する事態がしばしば起こる）。さらに、労働とは無縁の生活態度にまでおよぶクルーのこうした全人格的な学習を通じて、各クルーたちは漁師として、かつクルー集団の一員としてのアイデンティティを否が応にも構築していくことになる。

### 3.3 クルーの雇用——Aの漁船のサケ漁業操業

前項で見たように、漁業とくにサケ漁業の操業には、各クルーの高度な技能が不可欠となる。では、クワクワカワクウの船長たちは、高度な技能を持つクルーをいかに獲得するのか。以下ではサケ漁業時におけるAの例年（1990年代）のクルー雇用について紹介する。

船長であるAは44歳（以下、クルーの年齢はすべて2000年当時）である。彼は、9歳の頃から祖父の漁船で働きはじめ、高校に通う時分にタイアアップになった。高校

卒業後、彼は医者を目指してカレッジ（専門学校）に入学したが、1年もしないうちに中退して専業の漁師になった。以後、19歳で船長になるまで、クルー長として甲板業務をしていた。

1990年頃から2002年まで、この漁船ではロシア人の技師が雇われていた。この人物は、技師にもっとも不可欠とされる機器の整備において豊富な知識と卓越した技能を持っていたが、過度の飲酒のせいで解雇された。2003年現在、新たにニュー・ファンドランド州出身のヨーロッパ系カナダ人が技師として雇われている。

ドラム操縦者には、通常Aの長男B（25歳）が配置される。Bは16歳で高校を退学してすぐに漁師になった。彼の退学に対し、漁師になるのに学歴は必要ないと考えるAは何も文句をいわなかったらしい。スキフ操縦者、タイアップを経てドラム操縦を任されるようになったBは、2003年船長になる資格を得た。Aによれば、彼は2004年から船長になる。

Aの漁船では、ドラムの操縦からスキフの操縦まですべての業務をこなせる甲板のクルーが乗船する。この任務に就くのはAの次男C（22歳）である。高校に在学していた16歳の頃にまずニシン漁業の調理師兼甲板雑務者として漁に参加したCは、17歳のときにBと同様高校を退学してサケ漁業のタイアップになった。以後、タイアップがつぎに紹介するDに担われるようになって以来、Cは甲板業務全体の補佐を任されている。Cはドラム操縦者に昇格するに足る十分な技能を持っているが、兄のBがまだ船長に昇格できないため、甲板業務に甘んじているのである。ただしBが船長になる2004年から、Cはドラム操縦者に昇格するはずである。

タイアップはAの養子D（25歳）である。中学生の時にAに養取されたヨーロッパ系カナダ人のDは、Aの実子と違って中学・高校在学時の夏を漁船で過ごす必要がなかっただけでなく、半ば強制的に漁師にさせられることもなかった。高校卒業後、彼はナナイモに出稼ぎに出ていたが、20歳になってからはシーズン中に限って自主的にスキフ操縦者として携わるようになった。そして後述するEが漁師になるというときに、タイアップに昇格した。

スキフ操縦者であるE（29歳）は、Aの妻方オイである。Eは母親とアルバータ州に住んでいたが、20代半ばに母の姉（Aの妻）を頼ってキャンベル・リバーに引っ越してきた。したがって、Eの漁師経験は、彼がキャンベル・リバーに引っ越してから3から4年しかない。

このほか、サケ漁業シーズンに限り、Aの妻が調理師として毎年乗船している。また、ニシン漁業においてはAのオイ（姉妹の息子たち）が甲板雑務に召集される。

このように、Aの漁船のクルーは船長であるAの親戚関係を通じて雇用されているが、この雇用方法はAの弟たちが船長を務める漁船だけでなく、他のクワクワカワクゥ漁業漁師たちにも確認される。2節で述べたように、この雇用方法は、古くはサケ漁業がバンクーバー島で開始された1880年代にまで遡ることができる。サケ漁業の発足以来、缶詰工場は先住民労働者（漁船のクルーと工場労働者）の雇用をリクルーターに委ね、そしてリクルーターは彼と血縁・地縁関係にある人々を幅広く雇用してきた。1920年代以降、先住民がみずから漁船を所持するようになると、クルーの雇用は次第にリクルーターの手を離れて各漁船の船長に任されるようになったが、親戚を雇用するという傾向は現在まで継承されている。ヨーロッパ系カナダ人漁師が公募によってクルーを募ることと比べると、先住民の雇用方法には明らかな利点がある。つまり、毎年安定して同じ人物をクルーとして確保できることである。これによって徒弟的な集団の構成が安定し、ひいては長期的な技能学習が可能になるのである<sup>14)</sup>。

先住民特有のこの雇用方法に少なからず影響を与えているのは、クワクワカワクゥ社会に存在する「漁師の息子は漁師になる」という強い規範である。筆者がキャンベル・リバーで観察した限り、1人の若者をのぞくすべての成人男性が、少なくともニシン漁業の甲板雑務をおこなっている。唯一漁師になることを拒んだこの若者（彼はAの三男である）は会計士になりたいと考えているが、高校を優秀な成績で卒業したことで、父親に大学進学を認めさせた（しかし彼も高校在学中は漁につれていかれた）。反対に、優秀な成績で高校を卒業しない限り、若者は漁師になることを拒むことができないのである。

### 3.4 収入<sup>15)</sup>

クワクワカワクゥ漁師たちは、漁業からどれほどの収入を得ているのであろうか。Aの語ったところによると、まき網漁師の収入は、まず水揚げ総額の60パーセントがクルーの収入となる。船長を含めたクルーたちは、この60パーセントを等分するのである。残りの40パーセントは船長の取り分になるが、そのすべてが彼のボーナスになるわけではない。彼はそこから漁船の維持費、クルーの食費などを出さなければならぬからである。

2000年時のニシンの正確な総漁獲数と水揚げ総額は不明である。しかしC（Aの次男）が筆者に語ったところによると、彼は2000年のニシン漁業において約8,000ドルを得たという。また甲板の雑務をおこなった「初心者」の少年たちも、それぞれ

2,000ドルを手に入れたらしい。原理的には、船長であるAは正規のクルーとしてCと同じく約8,000ドルをもらうほかに、いったん水揚げ総額からクルー全員分の収入額を引いたすべてを手にする。しかし、「親父の収入は俺たちのほぼ倍」というCの発言から察すると、Aの収入は16,000ドル（つまりボーナス額は8,000ドル）にしかないことになる。なお、別の機会にAもニシン漁業の平均的な収入額は約8,000ドルだと述べている。

2000年のサケ漁業の場合、Aのまき網漁船の総漁獲収入は約100,000ドルになることがわかっている<sup>16)</sup>。ここから彼の漁船に登録されたクルー6人（正規の5名のクルーと、調理師のクルーとして乗船していたAの妻）の1人あたりの収入を算出すると、約10,000ドルとなる（この金額もまた、Aが語った平均額と一致している）。一方で、ボーナス額が不明である以上、船長であるAの収入総額は算出しにくい。ニシンと同様クルーの倍くらいであるとすれば、約20,000ドルになる。金額だけをみれば、サケ漁業の収入はニシン漁業のそれより若干多い。しかしニシン漁業の実質の操業日数が2日であったのに対し、サケ漁業の実質操業日数は22日あったことを考えると、サケ漁業の日給はきわめて低いといえる<sup>17)</sup>。ニシン漁に比べてサケ漁に人気がないのはこのためである。

このように、クワクワカワクウのまき網漁師の場合、2000年に2つの資源を対象とした漁業から、クルーは約18,000ドル、船長は36,000ドルの収入を得たことになる。キャンベル・リバーの就職事情<sup>18)</sup>と物価状況を考慮した場合、18,000ドルという金額は10代後半から20代の独身男性にとって、一年間生活できない額ではない。また、多くの男性が出稼ぎに他州にいかざるを得ないことを考えれば、地元に残って安定した収入を得られる彼らはむしろ恵まれているほうだとも考えられる。しかし、クルーたちが結婚して家族を養うことになった場合や自家用車を購入しようとする場合、当然ながらこの収入額では不足する。そのため、どうしてもオフシーズンに何らかの労働に従事する必要性が生じるのである。他方で、大半は家族を養う船長らにとっても、36,000ドルという収入は決して多いとはいえない。しかし、Aが妻を調理師クルーとして登録したように、船長のほとんどは自身の妻や独立していない息子たちをクルーに起用し、彼らの収入の全額あるいは一部を家計にまわしている<sup>19)</sup>、必ずしもオフシーズンに働く必要はなかった。

## 4 オフシーズンの活動—漁撈とその他の活動

年に2回の漁業シーズンを中心に生活している漁業漁師たちにとって、オフシーズンの活動は大きく2つに分けられる。自家消費する食料を得るための生業（漁撈）活動と、漁業操業以外のパートタイムでの賃金労働である。これら2つの経済活動の現状を、Aとその親戚たちの事例から紹介したい。

### 4.1 生業活動

20世紀を通して、北西海岸の先住民の生業（おもに漁撈）活動は、行政レベルにおいて食糧獲得の目的に制限されてきた（2.2参照）。1990年のスパロー判決以後、食糧獲得のほかに社会的・儀式的な目的も認識されるようになったが、それでも漁撈で得たサケ資源の換金が認められていない現状から窺えるように<sup>20)</sup>、食糧獲得以外の目的は大きく制限されたままである。

先住民のサケ漁撈の重要性が法的に保障されたとはいえ、それはあくまでサケ資源の保護に抵触しない限りにおいてのことである。そしてこの条件によって、現在でも漁撈の実施はある種の制限を受けている。たとえば大陸側の内陸部に住むごく一部の先住民をのぞいて、サケ漁撈は海域でしか認められないし、サケの遡上期間によっては漁撈スケジュールに制限が加えられることもある。他方で先住民の側も、漁撈をおこなう期日を決定するにあたって、漁撈よりは漁業操業やその他の賃金労働を優先する傾向がある。

#### 4.1.1 捕獲

Aらが2000年に自家消費用に採取した資源は、サケ（ベニザケとシロザケのみ）、カニ、エビ、ハマグリ、オヒョウであった。そのほかニシンや海藻類が漁撈対象としてあげられるが、2000年これらの資源をAは獲らなかつた。なお、クワクワカワクウの食事には欠かせない資源であったユーラコーンは、現在ではアラート・ベイの一部の住民だけによって捕獲されており、Aなど他の居留地の住民はアラート・ベイの人々からの分配に依存するしかない。

現在、漁撈対象資源のほとんどは最新の機器を搭載した漁船で採取される。たとえばサケやニシンの漁撈には、サケおよびニシン漁業で使用されるまき網や刺し網が1970年頃から流用されている（これらの漁撈に携わるのも漁業操業の時と同じく

ルーである)。カニとエビは罟漁、オヒョウは延縄漁で捕獲されるが、これらの罟や縄を引き上げる際にも電動のウインチ（漁船に搭載）が使われている。しかしすべての漁撈が機械化されたわけではない。たとえばユーラコーンは機器を使わないタイプのまき網で捕獲されているし（MacNair 1971: 169–171）、オヒョウ漁にあたって延縄ではなく釣りにこだわる漁師たちも多い。

カニ、エビ、オヒョウの捕獲に必要な罟や縄は漁船に常備されているため、これらの資源は海上にいるいかなるときでも捕獲できるようになっている。事実、Aらの場合、これらの資源は何か別の目的——漁業操業や養殖場労働——のために海上にいる際、気が向いたときに捕獲されるのみであり、その捕獲を目的にしてわざわざ出航することはなかった。これらの資源の捕獲は5月から6月にピークを迎えるものの、基本的には1年を通しておこなわれる。

カニやエビとは対照的に、サケとユーラコーンは1年の特定の日に決められた数量を捕獲するような資源である。サケの場合、例年ベニザケは8月の初旬、シロザケは9月下旬から10月までのいずれかの1日にとられる。先述したAの例からもこの傾向が窺えるだろう——彼らはベニザケを8月10日、シロザケを10月30日に漁撈用に捕獲した（2.4参照）。この日程を決めるのはヌマイムの首長であるAの父なのだが、彼によれば、ベニザケの漁撈日程を計画するのは容易ではないらしい。なぜなら、クワクワカクゥはフレーザー川に遡上するベニザケをジョンストン海峡上で捕獲するのだが、先述の通り、このベニザケがジョンストン海峡を通過する期間はきわめて短く（毎年7月下旬から8月上旬にかけての1–2週間）、しかもAら漁業漁師たちは、この期間の大半を漁業操業に費やしているからである（もちろん漁撈より漁業操業のほうが優先される）。したがって、ベニザケ漁撈をおこなえる具体的な期間は、ベニザケがジョンストン海峡を通過する期間全体よりもはるかに短いことになり、もし的確に漁撈日程を計画できなければその年の予定量を得られない可能性も出てくる。2000年のベニザケ漁撈がジョンストン海峡での漁業オープニング（8月7、8日）の翌々日に急いでおこなわれたのは、このためである。他方でユーラコーンの場合、5月から6月にかけてアラート・ベイの人々がナイト・インレット（Knight Inlet）という場所にキャンプをはり、そこで漁と油脂の精製・加工がおこなわれる（MacNair 1971: 169–176）。

#### 4.1.2 分配

エビ、カニ、オヒョウなど、人々が海上にいるときに適宜捕獲される資源の場合、

その分配は基本的に捕獲に参加した人々の内部に限られる。これらの資源は、たとえば「今夜はオヒョウのステーキが食べたい」というように、夕食の1メニューを満たす目的で捕獲され、分配および消費されるにすぎないからである。ただし、大漁で余剰がでた場合には、これらの資源は漁船を降りた後捕獲に参加した人々からその家族や友人たちに分配される。なお、Aによれば、ニシンの分配と消費も同様である。

対照的に、サケとユーラコーンはできるだけヌマイムの成員すべてに分配されるよう期待される。Aのヌマイムの場合、ベニザケとシロザケの捕獲尾数はあらかじめ1,200尾と定められており、捕獲後は蒸して瓶詰め加工された後に、まず捕獲に携わったクルーの希望に応じてクルー間に分配され、Aと首長である彼の父が残りのすべてを確保した。これらのうち、必要な数の瓶を2人が確保し、その残りを出漁しなかったヌマイムの成員たちに分配した。なお、これらのサケ瓶は、遠方からの友人に対し贈答品としてしばしば与えられる。

アラート・ベイ、ウミスタ文化センターのウェブスターによると、ユーラコーンの油脂の瓶はまずアラート・ベイで開かれる油脂祭宴 (grease feast) において、それに出席したクワクワカクウの首長たちに分配される。油脂祭宴は、ホストであるアラート・ベイの人々がゲストであるその他のクワクワカクウにユーラコーン油脂の瓶を贈与するポトラッチの形式をとる (Cranmer-Webster 私信)。そしてゲストとしてこのポトラッチに参加し、油脂を得たアラート・ベイ以外の首長たちは、みずからの親族集団の成員たちに再分配するのである。

#### 4.1.3 消費

Aの家庭において2000年に漁撈資源が消費された回数は、表1に示す通りである。表1から窺えるように、まず漁撈資源の消費回数は、年に22回ときわめて少なかった(その他の食事はパン、肉、野菜などヨーロッパ系カナダ人が頻繁に利用する食材のみから構成された)。漁業シーズンや養殖場での労働期間中に漁船で寝泊りするAの家族では、この期間漁船で生活するAらと家庭に残された人々は別個に食事をとることになる。しかし、聞き取り調査によれば、後者が漁撈資源を消費することは一度もなかった。つまり表1における家庭での消費はすべて、Aが家にいるときのものである。漁撈資源の消費が全体的に少ないとはいえ、Aが漁船ですごすときには14回消費されたのに対し、家庭での消費は8回と、いっそう少なくなっている。さらに家庭での食事のうち、ベニザケのバーベキューが給仕されたときのぞく7回は、A1人もしくは彼と息子の誰かによって消費されている(つまりAの妻や娘たちは消費

していない)。

表1から窺えるもう1つの点は、カニ、エビ、オヒョウが夕食時に出されるのに対し、サケやユーラコーンの油脂は朝か昼に消費されていることである。この事実を彼らの食事の様式と照らし合わせると、次のような特徴が見出せるだろう。

Aの家庭に限らず、筆者が実際に観察したクワクワカワクウの家庭においては、ヨーロッパ系カナダ人に典型的な食事の様式——家族全員が揃って食卓につくのは夕食時だけで、朝から夕食までの時間は各自が食べたいときに好きな軽食（シリアル、サンドウィッチ、パスタなど）を作って食べる——が確認された。この食事の様式においては、朝から昼にかけて各自がとる食事は軽食であり、家族が揃って食べる夕食は豪華なもののみなされる傾向がある。Aの家庭における漁撈資源の消費のあり方を見ても、たしかにこの傾向が窺える。つまり、朝から昼にかけてサケとユーラコーンの油脂が消費される場合は、それぞれサンドウィッチの具、魚介類のソースなどの軽食として、Aだけ（あるいは彼の息子の誰か）が消費する。それに対し、夕食時に漁撈資源が消費される場合は、塩茹でされたカニやエビ、オヒョウのステーキ、ベニザケのバーベキューなどが家族全員で消費されている。このとき、エビ、カニ、オヒョウなどの食材が「ご馳走」あるいは豪華なものと考えられていることは、夕食時にサケ瓶を出すと「相応しくない」と家族からしばしば文句があったことから理解される。このように、漁撈資源を実際に消費するという局面においては、サケとユーラ

表1 A宅での漁撈資源の消費回数（サケの瓶詰めにはベニザケとシロザケ、ユ・サにはカラフトマスが使用される）

	家庭での消費	漁船内での消費	合計
朝から昼にかけての食事メニュー			
サケの瓶詰め（サンドイッチの具）	2回	1回	3回
ハマグリ（とユーラコーン油）	1回	なし	1回
数の子（揚げる）	2回	なし	2回
ユ・サ（サケのスープ）とユーラコーン油	なし	2回	2回
夕食のメニュー			
ベニザケのバーベキュー	1回	なし	1回
カニ（塩茹で）	2回	5回	7回
エビ	なし	5回	5回
オヒョウ（ステーキ）	なし	1回	1回
消費の合計	8回	14回	22回

コーンよりはエビ、カニ、オヒョウなどのほうが豪華な食材として認識されるのである。

## 4.2 その他の経済活動

漁業のオフシーズンにおける漁撈以外の活動として、おもに彫刻活動と養殖場労働がある(2.4参照)。本項ではこの2つの活動について、活動内容と収入面から述べていく。

彫刻活動に従事するのは、当然ながらその技術をもつ人々に限られる。こうした彫刻家には、その作品を高価で売れるほど著名な人物もいれば、そうでない人物もいる。しかし後者の場合でも、彫刻活動で何かしらの現金収入を得ることができるようである。たとえば、ある人物はヨーロッパ系カナダ人向けの彫刻セミナーに講師として招聘されていたし、別の人物は映画で使用するための仮面制作を依頼されていた。彼らが彫刻活動から得られる収入の幅は大きく、その金額の平均値を査定するのは難しい。それでも、さほど著名ではない26歳の男性が、漁業と彫刻セミナーの講師業からだけで妻と2人の子供を養えていることからして、著名ではない彫刻家であってもある程度の収入が見込めると考えられる。

これに対し、現在もっとも多くクルーたちにオフシーズンの現金収入の獲得手段を提供しているのがタイセイヨウサケの養殖場における労働である。1980年代以降、地元カナダの企業のほかに外国資本の企業がバンクーバー島北部の海域に養殖網を配置するようになり、1990年代の後半になるとおもに船長以外の若いクルーたちがこれらの養殖場でパートタイムによる労働を開始した。また、2000年からは、養殖企業側が漁船を利用した業務—養殖網の取替えや海上輸送—を用意したことで、Aなど船長クラスの漁師も養殖場で働けるようになった。

船長以外のクルーがおこなう一般的な養殖業務は、1週間の住み込みによる労働と1週間のオフからなっている。この労働に携わるある若者によると、収入は労働の1クルーつまり1週間ごとに1,000ドルであるから、彼らの月収は約2,000ドルから3,000ドルになるはずである。他方で船長クラスの漁師による養殖網の取替え作業の報酬は時給計算で支払われるが、平均すると週に200ドル、月に800ドルになった。ニシン漁業のシーズンである3月とサケ漁業のシーズンである7月から8月に漁をおこなわなければならない彼らは、漁業シーズンをのぞく9か月間だけを養殖場での労働に費やしている。

## 5 考察——社会・経済的側面におけるサケの位置づけ

以上、おもに筆者のフィールドワークで収集されたデータから、現代のクワクワカワクウの経済活動について記述してきた。これをふまえ、本節では、はじめに先住民社会内外から発せられる「先住民の社会・経済的側面におけるサケおよびサケ漁の意義」に関する語りの内容を検討する。この作業を通じて、われわれは、フィールドデータから理解されることと語りのなかで説明されることが必ずしも一致しない状況を理解するだろう。このずれを理解した上で、つぎに、語りにおいては軽視されるがフィールドデータからは浮き彫りになるサケの経済・社会的意義を考察することにした。はじめに、先住民社会を外側から観察する人々による主張、およびそれに影響を与える先住民自身の語りに関するいくつかの観点を整理しておく。

### 5.1 説明されるサケおよびサケ漁の意義——社会・経済的側面

カナダ政府、マスメディア、人類学者のように、先住民社会を外側から観察する人々ないし組織は、先住民社会でのサケとサケ漁の位置づけを説明する場合、おもに「先住民がすること」ではなく「先住民が語ること」に依拠してきた。では、先住民自身はいかなることを語り、そしていかに政府やマスメディアなどによる説明を左右してきたのか。以下の語りの例は、この問いに答える上での糸口を与えてくれるだろう。

①「昔も今も、サケはわれわれ先住民の主要食糧（main food）であり続けている。だからわれわれ先住民漁師が海の汚染に無頓着であるはずはない。海とサケが汚染されれば、結局は日々サケを食べているわれわれの身体に害が及ぶことは明白だ。」（2000年のある環境保全に関する民間フォーラムに参加したクワクワカワクウの首長のスピーチ、筆者記録）

②「私たちの村では、新しい[ライセンスの]規制によって少なくとも15人の船長がサケ漁業から追い出された。彼らは40代後半から50代の、漁以外知らない世代だ。…彼らの15の漁船がなくなると、最低75[人]の職が失われる。村にはそれに代わる仕事もない。」（Crammer-Webster 1988: 74）

③「私たちがサケの民とも呼んだらいい。この辺じゃずっとサケに頼って生きてきたのだから。今でも漁と海に頼っている。私たちはずっと、漁をしたいようになってきた。それがもうできない。…海は私たちの生活そのものだ。サケや漁という私たちの生き様を断ち切るのは、農民から土をとりあげるようなものだ。それなしでは生きていけない。」（ウミスタ文化センター制作の民族誌映画、『宝の箱（Box of Treasures, 1983年）』に登場する漁

師の発言)

④「私がサケをとるのをやめないのは、それが金のなる木だからではない。漁は私の生き様なんだ。サケをとるということは、ある意味お前とわれわれが毎朝歯を磨いたりするのと同じだ。歯をきれいにするとか、魚をとるといふ真の目的もあるが、実際そんなことを考えてやるわけではないだろう？いつも海にでてエンジンをかけたり、歯ブラシを口に入れたりしないと安心できないからやってるんだ。」(2002年Aが筆者にあてた電子メール)

以上4つの語りの例から窺われるのは、サケの主要食糧、貨幣を得る手段としての意義、そしてサケ漁の生き様としての意義である。

サケを主要食糧として捉える見方は、語り①に限らず数多く確認できる。語り①をみればわかるように、クワクワカワクワがサケを主要食糧という場合、そこには2つの条件がある。つまり、「サケは重要な食料だ」という認識そのものの存在、そして実際のある一定頻度での消費である(語り①で、海とサケの汚染によって先住民の健康が懸念されるのは、先住民が「日々サケを食べている」からである)。

サケの第二の意義は、現金を得る手段としてである。上述の語りでは、②と④からその意義が窺えるだろう。ただし、サケを現金獲得の手段とみなす語りのサンプルは、主要食糧とみなす語りと比べて極端に少ない。女性など、おもにサケ漁に携わらない人々とはともかく、実際にサケ漁業から経済的恩恵を受けている漁業漁師でさえ、この意義について語ることは少ない。この事実から、現金を得る手段としてサケを強調することをクワクワカワクワが否定していると推察することもできる。この推察を裏づけるように、現金を得る手段としてサケが語られる場合は必ずといっていいほど否定的な語調を帯びる。たとえば、語り②ではかような意義がすでに失われたこと、語り④ではサケの意義は貨幣獲得の手段だけではないことが強調されている。

他方で、語り③と④から窺われるサケ漁の意義を一語で言い表しているのが、筆者が「生き様」と訳した“way of life”という言葉である。この言葉は極めて抽象的で、それ故具体的な意味を掴みづらい。それでも上記2つの語りから、この言葉の具体的な意味として少なくとも次の要素があることが窺える。第一に、「今でも海に頼っている」、「農民にとっての土」という表現からも窺えるように、物質的・精神的に生きる支えとなるものという意味である。もう1つは、Aが漁を歯磨きに例えることから窺えるように、日常的なルーティンという意味である。

先住民の日常生活に根ざした社会・経済的側面のなかのサケとサケ漁の意義として、彼らの語りからは以上の3つが確認されるが、さらに2つの別の特徴も指摘できよう。まず、多くの場合サケとサケ漁に関する先住民の語りは、生業が中心的经济

活動であった伝統的時代におけるサケとサケ漁の意義がそのまま現在まで連続しているという語調を帯びる<sup>21)</sup>。つぎに、伝統的生業活動の連続性が強調される以上、サケ漁業の意義は過小評価されることが多くなる。すなわち、一方ではサケについて語る場合は貨幣獲得手段よりは食糧としての意義が強調され、他方でサケ漁について語る場合は漁業よりは漁撈が強調されやすいのである。

以上に述べたのは、先住民みずからが彼ら自身にとってサケとサケ漁が持つ意義として説明する際の語りの特徴であるが、先住民を外側から観察する人々による同様の説明をこれに照らし合わせると、両者がほぼ一致することがわかる。たとえば、冒頭でも述べたように、人類学者の論文では生き様、主要食糧としての位置づけが強調されるのに対し、収入源としての意義が語られることは少ない。他方でバンクーバー島に多くの読者を持つ地元の新聞でも、毎日のように環境保護主義者による「先住民によるサケ漁の方法を学ぶべきだ」という主張が見られるが、この主張からは「サケを適切に管理してきた伝統的な生業の方法や理念が今もなお息づいている」という想定が垣間見られる。「北西海岸の先住民社会では伝統的に男性がサケを捕獲し、女性が保存してきたのだから、サケ漁業や缶詰業への技術的適応は容易であった」というキューの議論（Kew 1990: 163–164）に窺えるように、総じて先住民を外側から観察する人々は、先住民側の主張を鵜呑みにしてきたと同時に、漁業操業を伝統的漁撈技術の応用だとみなすことで漁業操業を軽視してきたのである<sup>22)</sup>。

キューの議論に代表されるように、カナダ政府や人類学者による、先住民にとってのサケおよびサケ漁の意義に関する説明は、ある意味で国際的な市場経済に伝統的な生業経済がいかに適応しうるかという問題系を論点としていたといえる。そうした議論はいうまでもなく経済的側面の数量的分析を必要とするところだが、皮肉にも先住民社会を外側から観察してきた人々は、先住民自身の語りを——本項で語りを検討したのとは対照的に——きわめて表層的に捉えることで、数量的分析を放棄してきたのである<sup>23)</sup>。

## 5.2 検討

本項では、前項で指摘したサケおよびサケ漁の意義に関する語りの諸特徴を、フィールドデータをもとに再検討していく。前項の最後に述べたように、語りにおいては生業活動の領域からサケの重要性が説明されることが多いため、本項でもクワクワクワの生業活動の領域における諸側面——消費、分配、捕獲——から考察していく。

### 5.2.1 消費

Aの食卓の状況をみてもわかるように(表1)、現在、サケに限らず、漁撈資源の消費は伝統的なそれから比べると大幅に縮小している(4.1.3参照)。その要因としては、まずもって貨幣経済が浸透したことがあげられるだろう。現在、クワクワカワクウは、漁業操業や養殖場労働で得た現金を持ってスーパーマーケットにいけば、容易に、しかもヨーロッパ系カナダ人より安く、パン、野菜、冷凍肉などの食料品を購入することができる<sup>24)</sup>。これにより、クワクワカワクウは必ずしも日々の食糧を漁撈に依存する必要はなくなったのである。

全体的に漁撈資源の消費回数が減少するにつれて、サケの消費回数も当然ながら減少する。表1を見る限り、2000年にAの家族が漁撈資源を消費した22回のうち、サケの消費は6回、それに対してエビが5回、カニが7回である。つまり、表1からはサケが食卓にあがること自体が少ないだけでなく、エビやカニと比べてもとりたてて多く消費されているわけでないこともわかる。消費の実際の頻度という面からいえば、サケは主要食糧とみなしがたい。

他方で、認識レベルにおけるサケの主要食糧としての重要性は、少なくとも表1のような実際の消費に関する統計から検証できるものではない。それでも現在の採集狩猟民研究に見られるある傾向をふまれば、ある程度は表1から食糧としてのサケに対する認識のあり方を理解することができるだろう。現代の採集狩猟民研究では、ある資源が「ご馳走」とみなされるか、好まれるかという嗜好性の問題が、生業の現代的意義を計る1つの評点とみなされる傾向があるが(cf.岸上1996, 1999; スチュアート1996)、この考えに則る限り、表1はクワクワカワクウの嗜好のあり方を明らかに例示するものとして、食糧としてのサケに対する彼らの認識のあり方を物語っている。

表1において、サケはほとんど朝から昼にかけて個々人が軽食をとる際に消費されている(6回中5回)のに対し、カニ、エビ、オヒョウはすべて夕食時に消費されている。先述の通り、ヨーロッパ系カナダ人型の食生活が浸透したクワクワカワクウの食卓では、朝から昼にかけての個人的な食事は軽食として、家族が揃ってとる夕食はご馳走としてみなされており、サケの瓶を夕食時に出すことはしばしば非難される。これらの事実から察するに、サケはエビ、カニ、オヒョウほどにはご馳走あるいは豪華な食事とみなされていない。この状況は、狩猟から得られる「カントリーフード」の消費量が減少したものの、ご馳走と認識されていることが現代でも狩猟において食糧を得る動機付けになっているというイヌイトの例(岸上1999: 73-74)とは対照的